

「小倉織」年表—文献と現存するもの—

時代	年代	文献中の小倉織	出典	現存史料	糸の種類	製品	
江戸	慶長5(1600)	関ヶ原の戦 細川忠興豊前に					
	慶長10～元和2 (1605～1616)		徳川家康が小倉織の木綿の袴羽織を着て、鷹狩に出かける	柏崎具元「事跡合考」巻三 ※書かれたのは18世紀半ば	「利休尻ふくら」 箱の緒 (永青文庫蔵)	和綿・ 手紡糸	羽織、袴、帯、 下駄の緒など
	慶長17～19 (1612～1614)		京都南禅寺に小倉の蒲団、 小倉木綿が送られる	金地院崇伝「本光園師日記」			
	元和2(1616)		徳川家康の遺品の中に こくら木綿反物や風呂敷が含まれる		「駿府御分物御道具帳」		
	寛永2～7 (1625～1630)		細川忠興が小倉嶋の調達を家臣に命じる	細川小倉藩「奉書」 細川小倉藩「日帳」			
	寛永9 (1632)	小笠原氏小倉へ入城、 細川氏は熊本へ					
	貞観元 (1684)		小倉帯を前結びに・・・帯に小倉嶋、 しかも細し	伊原西鶴「好色二代男」			
	享保1～20 (1716～1735)		徳川吉宗が乗馬の際に小倉織袴着用		「徳川實紀」		
	元文1～5 (1736～1740)		木町の老婆が小糸（絹糸のように細い糸）を より袴地を織る (3本、4本をよりあわせる)		「門司新報」明治28		
	明和4(1767)		「毛綿の帯、袴地を見せられるが 皆下品である」		長久保赤水「長崎行役日記」		
	明和6(1769)		箱の緒小倉織也		細川興文「利休尻ふくら図」		
	安永年間 (1722～80)	足利地方へ小倉織伝播				「縞小倉羽織」 (徳川ミュージアム蔵)	
	天明3 (1783)		「小倉木綿は他国にはない上品なものである」	古河古松軒「西遊雑記」			
	寛政年間 (1789～1801)	備前児島で真田、常袴、 小倉帯盛ん					
	寛政～ (1789～)	諏訪小倉織盛ん					
	寛政7 (1795)		小倉島 *随分厚くもろより(双糸)の 木綿糸にて島をおる	津村涼庵「譚海」	小倉織全国各 地に伝播		
	文化7 (1810)		小倉侯より小糸島一反を贈られる	伊能忠敬「測量日記」			
	天保8 (1837)		小倉羽織 *厚き木綿綿で賤者羽織や馬袴に 用いる *雇夫の長、芝居木戸番が白茶堅綿 の袴羽織を着る 野袴 *小倉木綿の堅茶綿 粗い 小倉帯 *色は革色・茶・紺色など 種々、無地、縞筋	喜田川守貞 「近世風俗誌(守貞謄稿)」			
	天保13 (1842)		木綿類にて国産と呼べるものには小倉織が ある	大蔵永常「国益国産考」			
嘉永年間 (1848～1853)		小倉織盛ん 糸は京都大橋近辺から黒崎、 若松に至る10,000戸、織り手は藩士婦女の内 職3,000戸		「門司新報」明治28			
嘉永2～3 (1849～50)		島村志津摩の小倉織独占計画失敗	同上				
安政3～文久3 (1856～1863)		出雲の国に糸引きの稽古へ4人の女性派遣 道具も買って帰る		「中村平左衛門日記」			
慶応2(1866)	長州藩との戦いを避けて 藩士は城を自焼、八方に 離散				小倉藩士の袴(北 九州市立自然史・ 歴史博物館寄託)	洋綿・機械 紡績糸	袴、霜降りの 学生服など
明治	明治1 (1868)	明治維新					
	明治29 (1896)	小倉織物会社創立			青少年の袴25 点(北九州市立 自然史・歴史博 物館蔵)		
	明治34 (1901)	金融恐慌のおおりで 小倉織物会社倒産					
大正							
昭和	昭和初期	小倉織の生産が途絶える					
	昭和59(1984)	築城則子氏小倉織復元・再生				洋綿・機械 紡績糸	袴、小物など
平成	平成7(1995)	豊前小倉織研究会 発会				和綿・ 手紡糸	
	平成19(2007)	機械織りによる小倉縞綿 誕生 株式会社小倉縞 綿(旧(有)小倉クリエ ーション)					
	平成28(2016)	一般社団法人小倉織設立					
	平成30(2018)	小倉織協同組合設立					
		小倉織物製造株式会社設立					